広島女学院同窓会
東京支部ニュース

編集・発行　東京支部役員会

2022. 11. 1
第 80 号

今年度の聖句

主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい。 あなたがたの広い心がすべての人に知られるようになさい。主はすぐ近くにおられます。 どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。 そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう。　（フィリピの信徒への手紙 4 章 4～7 節）

幼稚園から大学まで広島女学院
刻み続けた奉仕の心

広島女学院同窓会 副会長　塩冶みはる（高校９、大英９）

私は幼稚園、中学から大学まで広島女学院で 13 年間を過ごしました。1961 年、広島女学院大学英文学部を卒業し、定年まで 32 年間広告会社に勤めました。会社勤めの頃は忙しく、今だから言えることですが同窓会のことにはあまり関心がありませんでした。退職後ある日、広島流川教会で今は亡き上野信子先生から声をかけられました。「塩冶さん、同窓会を手伝ってくれませんか。会社を辞めて暇でしょ？」1993 年のことです。

私が大学へ進学できたのは高校の宣教師の先生に奨学金を援助してくださる米国人を紹介していただいたからです。今でも感謝の気持でいっぱいです。女学院のために私で役立つことがあれば何かできないかと常々考えていたので、同窓会のことを詳しく知らないまま上野信子先生の一言で同窓会のお手伝いをすることになりました。あれからもう約 30 年経ちました。

東京支部と言えばどうしても秦知子先生のことを思い出します。学生時代にクワイヤの指揮者として私たち隊員を導いてくださったからです。秦先生と深いかかわりのある関東ブロック主催の「夏雲の集い」には度々出席しました。

最後に秦知子先生にお会いしたのは確か 2005 年「夏雲の集い」だったと思います。

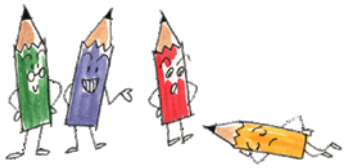
その２年後、秦知子先生が天に召されたのです。

翌年の 2008 年 8 月 8 日、日本基督教団　銀座教会で東京支部が開いてくださった「秦知子記念コンサート」にクワイヤアイリスは出演することになりました。夏の暑い早朝広島駅を出発、到着したのは 11 時半頃でした。学生時代クワイヤで秦先生にご指導を仰いだ曲、「Spiritual」、「You'll　Never Walk Alone」など心を込めて演奏しました。

そして 2019 年 8 月 8 日、クワイヤアイリスは夏雲の集い 2019～原爆死没者追悼礼拝～第２部で再び演奏する機会を与えていただきました。演奏したのは「ヒロシマの河」（四国五郎作詞、大峠健編、小玉好行作曲）です。私たちは歌で被爆体験を伝えようとしています。悲惨な戦争を２度と繰り返してはなりません。平和を祈るこの曲を広島以外の土地で、しかも銀座教会で演奏できましたことはとても意味のあることだったと思います。その時の感動は今でも忘れることはできません。

広島女学院でキリスト教教育を受け、よく遊び、よく学び、多くの同窓生とのよき交わりが出来ました。本当に有難いことです。今後もできる限り広島女学院同窓会のために奉仕させていただき、また「夏雲の集い」に参加でき、東京支部の皆さんとお会いできる日を楽しみにしています。

ーシリーズー　“私からあなたへ　同窓生の輪”　50



「制服デザインに込めた私の思い」

藤川浩子（高 31）

2007 年に女学院の制服デザインという素晴らしい機会をいただきました。

先ず初めに考えた事は、広島女学院の教育理念とアイデンティティーをどのような形でデザインに取り入れるかということでした。

私自身が広島女学院で過ごした 6 年間の中で得たかけがえのない友人や恩師との出逢い、卒業後も大切に繋いできた絆、お互いを認め合い助け合っていくということの大切さを日々の生活の中で学びました。

この“自由や個性を尊重し認め合い温かく育てていく”という教育理念の中で学び過ごせた事がその後の私自身の強い礎となっております。

その具体的表現として裏地に校章のデザインを織り込み、制服のチャームポイントであるリボンのカラーにも願いを込めました。中学高校時代は多感な 6 年間ですが、大人への一歩を踏み出す中学時代にはあらゆることに情熱をもって行動する力を養ってもらえるようにルビーレッドを、成人へのステップを上がる高校時代には物事を見抜く誠実な心や探求していく力をつけてもらえるようにジルコニアブルーを選びました。

そしてこのリボンには、結ぶという行為にも大切な意味合いを持たせています。

結びつきや絆を深めることを願い自らの手でリボンを結び、感謝の気持ちを込めて精神を整える。その大切な願いがそこには込められます。

私が考える“デザイン”とは、まずデザイン性や格好の良さだけではなく、そこに歴史とストーリーがあるということが何より大切だと考えます。したがって女学院の制服には女学院が持ち続ける普遍的なロマンを刻み込みたかったのです。

2020 年からはパンツスタイルやリュックも導入しました。活動的でスタイリッシュな要素が制服にも必要だと考えたからです。制服スタイルも普遍的であると同時に時代によって変化、進化していかなければならないと考えます。この機会に皆様に知っていただけましたら幸いです。

東京でのモーダイタリア展会場にて

ここで少しだけ私自身のストーリーも少し掻い摘んでお話ししたいと思います。

小学生の頃将来の夢は？と聞かれるとデザイナーになることと答えていたように思います。

広島女学院高校卒業後は東京の美大へと進学しアパレルデザインを専攻、卒業後は大手アパレルに就職、企業デザイナーとなりました。初志貫徹、意志を貫いたといえるのかもしれません。

デザイナーとして日々邁進し 7 年目を迎えた頃、会社からイタリアへの一年半の海外留学のチャンスを得る事が出来ました。留学中は現地のデザイナー事務所で働き、イタリア語学も学びつつイタリア人デザイナーのワーキングスタイルを身もって学びました。その後日本に帰国しましたが直ぐにミラノに現地法人が設立されることとなり再びイタリアへの出向となりました。私がアパレル企業に勤務した 18 年のうち 10 年間はイタリアで生活することとなったわけです。

1990 年代前半はまだ EU 統合前で通貨も伊リラの時代、折しも日本はバブル全盛で円も強く、イタリア商品自体の魅力に加え価格もリーズナブルに思え、全てが魅惑的な懐かしい時代でした。イタリアでの私の業務は自社ブランドに起用したイタリア人デザイナーとの間の企画コーディネートが主でしたので、イタリア人デザイナーたちが自由な発想で楽しみながらデザインを作り上げる秀でた能力に心惹かれ、彼らの力をいかに引き出し、ブランドを魅力あるものにするかにやりがいを覚えていたように思います。イタリアでのメーカー開発や日本向けの企画提案やイタリア生産現場を開発するなど、デザイナーの特色や工場の持つ得意技を生かしながら共に企画を作る、というプロデューサー的なことに充実感を感じる日々であったように思います。そして何より私にとってかけがえのない大切な宝となったのは、この在伊十年の間にイタリア人と個人としての信頼関係も育てることが出来た事です。それがその後の私の事業の礎となっています。

ベルガモ市チッタアルタにて

イタリア人と日本人は根本的な気質が似ており、西洋人にありがちなドライさではなく浪花節的な人情を重んじるところがとても似ていると私は感じます。イタリア人は衣だけではなく食、住においてもモノづくりの過程で深い愛情を注ぎ込み常にロマンを重んじます。こうした信条をもっているからこそ美しいものや美味しいものを作ることが出来るのだと彼らから多くを学びました。

それは日本においてのモノづくりも同じなのですが、イタリアに渡り、初めて日本の素晴らしさに気付く事が出来たのもイタリアと日本に共通点が多くあるからだと感じます。

とても充実した日々を 10 年過ごしておりましたが、1999 年に不況の煽りを受けイタリア現地法人が閉鎖となり日本に帰国することとなりました。通貨もリラからユーロとなりイタリア生産も価格的なメリットがなくなってしまった結果、この前後イタリアにおける日本のアパレル法人はその多くが閉鎖に追い込まれました。

私は日本へ帰国した翌年に 18 年間勤務したアパレル企業を自主退職、イタリアメーカーからの個人的な支援へのオファーが後押ししてくれたこともあり 2000 年に自社を起業、今期で 23 期目を迎える事が出来ました。現在は自社のブランド運営が主な運営事業となっております。

自社ブランドは“Rocofocchibelli”、このコンセプトは自由でしなやかな女性たちに向けて、作り手(メーカー)それぞれの持ち味を融合させモノづくりをする、という私の人生で会得した考えに基づいたブランドです。

広島女学院の制服には、この“Rocofocchibelli”のブランド名を起用させて頂いております。

“何のために学び、何のために生きるのか、平和で幸せな世界を実現するために自分にしかできない使命を見つけ追求する”という広島女学院の教えは、私自身の人生観となりました。

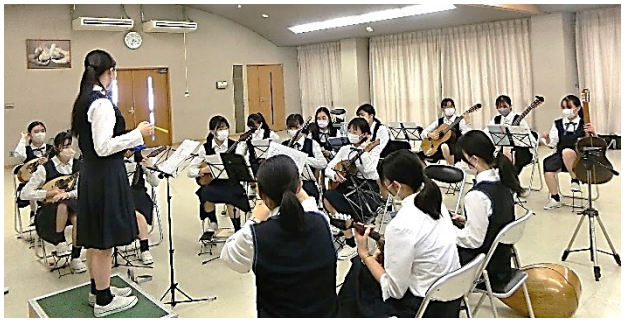
心より感謝いたします。

トピックス！　女学院中高マンドリンクラブ　朝日新聞社賞受賞！！

音楽を奏でる楽しさを味わう

広島女学院中学高等学校マンドリンクラブ　顧問　星野ゆり（英語科教諭／高 55）

広島女学院中高マンドリン部は現在、中学生 22 名、高校生 20 名で日々の活動に励んでいます。中高合同での活動ゆえ、経験の少ない中学生は、技術、経験を積んだ高校生の姿をお手本とすることができます。また高校生は、中学時代に自分たちが何に難しさを感じ苦労してきたのかがわかっているため、その立場に立って助言することができます。年が離れているからこその関わり方ができ、技術向上に大きな役割を果たしていることも大きな利点です。一方で、このマンドリン部という、いわば小さな社会の中で、上級生や下級生、そして同学年の中で人間関係を築いていくことの難しさも同時に経験していきます。普段の活動の中でお互いの様子を知り、認め合うことの大切さは演奏においても言えることです。自分が奏でる音だけでなく、他パートとのハーモニーを意識することが、皆で曲を作り上げる際には欠かすことができないからです。一筋縄ではいかない現状の中で悩みを抱えながらも、それに向き合いつつ日々歩みを進めています。



さて、毎年 7 月に行われるマンドリンの全国音楽コンクールは、日々練習に励んでいる生徒たちにとってとても意義深い大会です。それは単に出場して賞を得ることが一番の目的ではありません。上級生にとっては、この大会をどのように迎えるかを後輩に伝えていくことが必要です。下級生にとっては、上級生がどのような思いをもって臨み、自分たちを引っ張っていってくれるのか、目の当たりにする機会となります。今回の全国大会は、最高学年として部をまとめ、引っ張っていく経験がまだ浅かった高校 2 年生が主体となって臨んだ大会となりました。彼女たちがこの大きな大会に向き合うにあたって大切にしたことは「全国大会の舞台を楽しむ」ということでした。自分たちが練習してきたことを、自信を持って堂々と披露し、何よりその時間を楽しんで弾く機会としたい。そのような強く熱い思いを彼女たちは後輩にも伝え、生徒たちが一つとなって演奏を作り上げることのできた舞台でした。楽しんで自分たちの演奏ができたことが今回の朝日新聞社賞の受賞につながったのだと思います。

これまでマンドリン部が活動を続けてくることができたのは、多くの方々の支えがあったからこそです。技術指導をしてくださっている松重先生、佐古先生そして藤井先生、卒業してからも後輩たちのために時間を作って尽力してくださる OG の方々、日頃のクラブ活動に理解を示し見守ってくださる保護者の皆さまの支えに感謝いたします。このようにして多くの方々の愛情に育まれていることを心から感謝しつつ、広島女学院中高のマンドリン部はこれからも歩みを続けていきます。

7 月 13 日(水)、横浜指路教会をお借りして 35 回目となる夏雲の集いを開催しました。
広島から竹内路子同窓会長をお迎えし、参加者は 35 名でした。

夏雲の集い 2022 に参加して　和田美千子（林/高 20･文英 2）

コロナ禍で 2 年ぶりの夏雲の集いへの出席となりました。今年は横浜で開催されるということで、思い切って神奈川支部の友人とまいりました。指路教会は立派なパイプオルガンを備えた重厚な建物でした。

藤掛牧師のウクライナ･ロシア戦争を交えたイザヤ書の説教を聞き、一日も早い戦争終結をと願いました。広島を離れて四十数年になりますが、広島女学院で学んだ者として、これからも平和を祈りつつ生きていきたいと思います。

第二部では、同窓生の黒田尚子さんのすばらしいオルガン演奏を聴かせていただき、しばしの至福の時でした。また、最後に校歌までパイプオルガンで伴奏していただき、なかなか得られない機会をありがとうございました。

コロナ禍でなかなか皆が集うのもままならない状況ですが、早い終息を願いつつ来年もまた集うことができますよう祈っております。

みんなの広場

･･･　会費の振込用紙通信欄や支部宛のお手紙から.　･･･

■野邊英子（藤原／高女 52）同窓会ニュースを見ると昔を思い出します。原爆の時を思うと感無量です。生きながらえています。

■佐々木タカコ（高 5）5 月 20 日、広島での同期会に森先生を迎えて 16 名集まりました。88 歳、皆、元気でした。その 2 日前に一級上の西尾（赤川） 操さんが亡くなられました。東京支部の宗教委員でした。

■竹澤サト子（野間／高 15）77 歳となりました。今年度の聖句「主において常に喜びなさい」。毎日膝が痛いとか腰が痛いとか言っている私に、「重ねて言います。喜びなさい」。喜んでばかりはいられない体の衰えだけど、はいはい、喜んで生きていますよ。感謝です。心に沁みました。

■大崎弘子（北大路／高 5）秋を感じさせるカード有難うございます。毎年楽しみにしております。88 歳になり、同級生も少なくなりました。皆様のお陰で新聞もホームページで覗けます。

■伊藤郁子（宮堂／高 11）未曽有の豪雨、暑さ、コロナなど、気持ちの滅入る事ばかりの中、お心のこもったカードをお送り頂き、嬉しく思います。

80 歳を超えても会費を納入して下さる方々82 名に役員の松岡理乃さん（木沢/高 30）の手作りの立体的な感謝のカードをお送りしました。

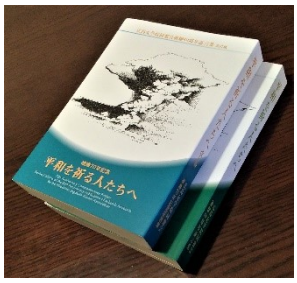
報告 同窓生が読む「広島女学院被爆証言集」の会

東京支部長　白井京子（高 23, 文英 5）

同窓会本部では毎年 8 月 6 日の平和祈念式で被爆証言集の朗読を行っており、私も 7 年前に読ませていただいた。読む人も聴く人も、静かに祈る場となっていた。8 月 6 日に対する東京と広島の熱量の違いを感じたこともあり、いつか東京でも、これを実現できないかと考えていた。

かねてより愛読しているカタログハウスの「通販生活」は通信販売の雑誌だが、戦争と平和、原発のことなど、問題提起をする雑誌という認識があったので、小さい会議室でもお借りしてこの会を実現できないかと代々木の本社に飛び込みで掛け合ったところ、快諾を得られて、社員用サロンを貸してくださる事になった。また、ぜひ同窓生以外の方にも聞いてほしいと、朝日新聞の別刷「定年時代」に記事を書いてもらったところ、これを見た方も、何人かお越しいただいた。

中に、94 歳で、たった一日の女学院生という方が参加してくださり、お話も伺うことができた。小川美佐子さんというこの方は、北九州の生まれで、勉強したい科目が広島女学院専門学校にあったので、昭和 20 年 4 月に入学され、戦況が厳しくなったので、一度、九州に戻られたのだが、登校するようにとの学校からの知らせで、8 月 5 日に寄宿舎に泊まり、次の日、朝会でチャペルに行こうとして列に並んでいた時、原爆に遭われたそうだ。証言集の中の小清水さんと同じ場所にいらしたらしい事もわかった。とてもお元気で、世田谷区からお一人でいらして、「記事を読んで是非、聴きたいと思ってきたのよ」と、仰ってくださった。



コロナ禍で、場所もそれほど広くない上、人数制限もあって、あまり宣伝もできなかったが、私の声かけに賛同してくれた朗読者 5 人、聞いて下さる方 20 人、そして、録画して下さった元テレビ朝日の上松さん、カタログハウスの釜池さんなどで、丁度良い人数となった。

朗読者は、民藝女優 笹本志穂さん、医師（元放送部）の久保田希さん、神奈川支部長 徳久碧さん、横浜市議会議員 三輪智恵美さんと私。 朗読者にはそれぞれ原爆への思いなどを話してから証言集を読んでもらったが、どの朗読も素晴らしかった。これからも、是非、続けていきたい。

日頃のご支援・ご協力に感謝いたします
支部活動は皆様の会費に支えられています

振替用紙が同封されていた方は
今年度の会費（2,000 円）の納入を
お願い致します

80 歳以上の方も
お気持ちが有りましたらお願い致します
振替用紙への電話番号・メールアドレスのご記入に
ご協力ください

＜振替用紙での振込料＞
・ATM
ゆうちょ口座（通帳・カード）から：152 円
現金：262 円
・窓口
ゆうちょ口座（通帳・カード）から：203 円
現金：313 円

銀行振り込み
三菱 UFJ 銀行　高田馬場支店
普通預金　0473771
広島女学院同窓会東京支部

後輩たちに伝えたい 広島女学院・安田学園 被爆の記憶と記録

原爆により 300 人以上の生徒が犠牲となった 2 つの女子校、廣島女学院と安田高等女学校の被爆の記憶と記録を伝える催しが、「戦争の記憶と記録を語り継ぐ映画祭」の特別企画として、広島で行われ、女学院が 1991 年に制作した映画「夏雲」が上映されます。

●日時:2022 年 **11 月 23 日(祝)**

●会場:**広島** YMCA 本館 地下 1 階 国際文化ホール(広島市中区八丁堀 7-11)

第 1 部:広島女学院 11:00～

▸映画「夏雲 – 逝きしものへのレクイエム」(40 分)上映、トークショー(山本洋子監督)

▸被爆証言(小方澄子さん)、朗読(白井京子・東京支部長)、展示説明(庭田杏珠さん)

第 2 部:安田学園 15:00～

▸映像「追跡！原爆影響報告書-隠された安田高女の記録」(26分)上映、講演(御手洗志帆さん)

▸被爆証言(梶本淑子さん)

【参加料】第 1 部、第 2 部 各 1,000 円(高校生以下 500 円)、オンライン配信あり

【主催】 一般社団法人昭和文化アーカイブス (主催者 御手洗志帆)

【お問い合わせ】東京支部 gaines_tokyo@yahoo.co.jp

同窓会本部 082-221-1059 (チケット取りまとめ)

詳細はこちら➡

東京支部ニュース第 2 号 (1990 年 9 月発行) より

広島女学院 原子爆弾被災記録映画
「夏雲 ― 逝きしものへのレクイエム」

山本佳永子(秦 知子／高女 54・専英 26)

学校法人広島女学院が被爆 45 年を機に、学校の被災状況を大切な記録として 16 ミリ映画に収め、学生・生徒の平和教育の為に用いることになりました。その経緯をお話ししておきたいと思います。

広島女学院が創立 100 周年の行事・事業の一つとして、牛田山にある原爆慰霊碑の整備をされた際、収められていた死没者名簿も傷みがきていたので、原田寿先生が新たに毛筆で 350 名のお名前を書き写され、その写しを東京支部で一部頂戴しました。

千人を超す同窓生が東京に在住し、毎年集まりながら原子爆弾の犠牲となられた恩師や先輩や友人の追悼もしていない事実を反省し、何とかしなければと考えていた時でしたので、その名簿は私達の心を揺さぶり、一人一人のお名前がそれぞれの歴史や生活を持つ生きた名前として、私たちに何かを訴えているような気がしたのです。350という数と姓名は、どんな説明や話よりも深く、意味を持っていると感じた私たちは、その名簿をそのままスライドにして皆様にも見ていただくことにしました。

その後、スライドに説明やナレーションを加えたりして、毎年少しずつ工夫を重ねて行きましたが、それと同時に、広島女学院がどのような状態で原子爆弾の被害を蒙ったか、どれだけの先生、職員、生徒を失ったか、という歴史的事実を正確にフィルムに残しておくべきではないかと母校に提言しました。

日頃から平和教育に熱心な橋本校長は即座に賛同して下さり、制作実行委員会が編成されました。学校法人広島女学院が制作母体となって、山本洋子氏にシナリオをお願いし、広島で撮影が始まりました。被爆された卒業生の方々の証言が中心となりますので、これまで口を閉ざしていらした方々にも無理をお願いして証言して頂きました。私たちが原爆体験を継承して行く為には、どうしても被爆者のお話を聞かせて頂かなければならないのです。被爆者には、自分自身が傷ついた悲しさ、恐ろしさ、将来への不安を持った方もありますし、大切な肉親を悲惨な状態で見送った悲しさ、辛さを早く忘れたいと思っていらっしゃる方もたくさんあります。更に、自分は生き残ったという「後ろめたさ」のようなものがどうしてもついて回るのです。自分の健康に対する不安を除けば、被害の少なかった私のような被爆者もたくさんいますが、そうした生き残りの被爆者は「何故自分が生き残ったか」という思いをぬぐい去ることができないのです。死んで行った人たちがどんなに熱かったか、苦しかったか、痛かったか、心細かったか、無念だったか・・・それだけでもまわりの人達に語り伝えて、二度と同じようなことが起こらないようにしなければ、私達が生き残った意味は無いと思えるのです。

クリスマス礼拝

12月 17 日（土）

午後1時 30 分～3時 30 分

（受付開始 1 時）

日本キリスト教団 銀座教会

東京都中央区銀座 4-2-1
JR 有楽町駅 中央口より徒歩 5 分
東京メトロ銀座駅 C6 または C8 出口よりすぐ

礼拝・説教 ： 髙橋 潤 牧師
パイプオルガン コンサート

～ 手芸品のミニバザーもお楽しみに！～
（献品も歓迎いたします）

問い合わせ：090-3200-5551（白井）

他支部のクリスマス会

神奈川支部 12 月 16 日(金)
午後 1 時半～3 時 於・藤沢教会

千葉支部 12 月 5 日(月)
午後 1 時半～3 時 於・新津田沼教会

伝 言 板

「広島女学院・安田学園 被爆の記憶と記録」は
11 月 23 日広島での開催です。一般の方もどうぞ。
チケットは、同窓会本部でも取り次いでいただけます。
会場に行けない方はオンライン配信をご利用下さい。